

富永神社祭礼能「杜若」

三河の国八橋の沢辺で杜若の精が現れ、在原の業平が極楽の歌舞の菩薩の化身であり、その詠歌は法身説法の妙文で、非情の草木も救われると説く。続いて、業平の多くの恋愛事も、結局は、彼女たちを済度するための方便としての結縁だったと明かされ、杜若の精の成仏劇がそのまま女人済度の劇として結ばれる。

能装束「紅地蛇籠に芦模様縫箔」は江戸中期の作と思われ、紅地の装束全体に斜め右上がりになぞりした竹の幹が並び、その間に摺箔で籠目を置いた蛇籠が描かれ、その間の此所彼所に芦の一群が見える。芦はひわ色、白、黄、緑などの色糸で縫い表しており、丈も低く早春の目立ちの頃の清新な感がある。



紫地唐草花丸尽し文様長絹



紅地蛇籠に芦文様縫箔（江戸中期）



富永神社祭礼能「経政」

仁和寺の僧の行慶によって青山という銘の琵琶を手向けた回向の弔いに感謝した平経政の霊が現れ、なつかしげに琵琶を弾き、舞を舞い、心楽しんでいたところ、突然修羅の苦しみに襲われ、身を焼く苦患を恥じて消えていく。

能装束「萌葱地花籠露芝模様長絹」は、江戸中期の後半の作と思われ、萌葱地色の絹地に露芝を下に散らし、背と両袖に萩と桔梗、薄の一叢を金糸と色糸で繰り出している。模様は殆ど金糸で織られているが薄浅葱や納戸紫などで折々に加えて金糸の強さを抑えて優雅に仕上げている。



萌葱地花籠露芝文様長絹（江戸中期後半）



格子波宝巻紋三ツ鱗文様厚板



富永神社祭礼能「半蔀」

雲林院の僧が立花供養を行っていると一人の女が現れ、夕顔の花を手向ける。女は五条あたりの者だと告げ、花の陰に隠れて見えなくなってしまう。僧が五条あたりに出かけると、寂しい秋の景色、夕顔の亡霊が家の内から眺めている。蔀戸を上げて姿を見せ、源氏との思い出を語り、舞を舞うが、やがて、夜の明けぬうちにと、蔀の内に入って行く。

能装束「鬱金地雅楽器文様長絹」は、江戸中期前半の作と思われ、鬱金色の絹地に箏と排簫、箏と笙、笙と排簫などの雅楽の楽器を組み合わせて織り出した長絹である。明るい地色と白、萌葱、黄、茶、紫、黒、鼠などそれほど色数はないが巧みな組み合わせで三種類の楽器を典雅に表現している。金糸はおさえめである。



鬱金地雅楽器文様長絹（江戸中期）



富永神社祭礼能「高砂」

肥後国阿蘇神社の神主友成が、都へ旅立つ途中、播磨の国高砂の浦に立ち寄り、老翁・老婆に出会う。二人は、高砂・住の江の相生の松の精であり、住吉にて待つと言い船で沖に消えた。友成が船で住の江に着くと、住吉明神が出現し、春景色を賞し、御代を祝って舞を舞い、民の安全と君の長寿を念願し、松吹く風の音に平和な響きを楽しむ。

能装束「紺地花入り亀甲雪持笹模様の袷被」は、江戸後期の作と思われ、紺地に大振りの花入り亀甲と雪持笹模様がくっきりと浮かび上がる金欄。袷狩衣は神、天狗などの強い役柄や皇帝、大臣の正装として用いられる。



紺地花入り亀甲雪持笹文様袷狩衣（江戸後期）



富永神社祭礼能「融」

上京してきた僧が、仲秋の名月に六条河原院を見物していると一人の老翁が田子を荷って現れる。河原院は融の大臣が陸奥の塩釜の景を移したところであり、毎日難波の御津の浜から潮を汲んで運ばせるなど楽しんでいたが、亡くなられた後は、荒れ果ててしまったと述べ、付近の名所を教えた後、潮を汲みに姿が見えなくなってしまう。

旅僧が寝ていると融の大臣が貴公子の姿で現れ、名月の下、舞を舞い、夜のあける頃都へと去っていく。

能装束「薄茶地瑞雲芙蓉唐草模様単法被」は、江戸後期の作と思われ、薄茶の緞地に瑞雲と芙蓉唐草を織り出した金襴の単狩衣。単狩衣は老いた神、貴人の霊などに用いられる。



薄茶地瑞雲芙蓉唐草模様単狩衣（江戸後期）

